

ずいそう



国際シンポジウム奮闘記 —ISROMAC-8 in HAWAII—

四 宮 伸 浩

昨年3月、ハワイ・ホノルルで開催された国際シンポジウムに参加のため、「憧れのハワイ航路」ならぬ「空路」でハワイ行きの機会を得た。ホノルル空港到着後「アメリカは違うな!」と感じた。大型バスほどの長さのリムジン、道路の車線数、常夏のビーチ…。これがハワイなんだと自分に思い込ませた。主目的の会議は、第8回国際流体回転機械会議 (ISROMAC-8) と呼ぶ。本会議は、2年毎に開催され今回で8回目を数える。日本、アジア、アメリカおよびヨーロッパなど広範な地域から、170~180名近くが集まり、3会場に分かれて講演発表が行われた。「液体回転機械」を網羅する発表だけに、テーマ数は多く160余本あった。

今回、当社が本会議で発表することになった切っ掛けは、大阪大学の辻本教授から「御社の新製品「歯車減速機搭載型立軸ポンプ」が、この会議の趣旨に合っているのでは是非発表してみてもは?」とのEメールを頂いた。早速、英文にて「アブストラクト」を提出し仮採用の通知を得た。本論文の提出にあたっては、同行の佐藤氏(当社技術研究所長)が、堪能な語学力を生かして夏の1ヶ月ほど、夏休みと土日の休日を全部使って仕上げた。お陰で、本部の4人のジャッジからは心強い評価を頂き、努力に対する報われた気持ちと、当社の製品も世界に顔見せできる機会を得て心底心地よかった。

講演は、26日のレセプションに引続き27日から始まり、午前中の全体会議では三つの特別招待講演が行われた。一つは、ボタンサイズのマイクロ・ガスタービンで、直径21mm、厚さ3.7mmの中に17ワットの動力を発生できるものであった。その他、CFDを多用した敏活なエンジニアリングに関するものと、もう一つは、日本からターボ形人工心臓ポンプに関する発表であった。28日には、講演終了後の夜7時からバンケットが催された。国際会議には付きもののバンケットだが、座るテーブルに注意した。早めに会場へ足を運び、日本人ばかりが集中する席だけは避けた。幸い、アメリカ人3人、フランス人2人、スイス人1人、台湾人1人そして日本人2人(私と佐藤氏)の計9人という組合せとなり、円卓を挟んで会話は弾んだ。29日、いよいよ出番である。私たちの発表内容は、国内では既に10数台の納入実績を有し、現在、

国土交通省中部地方整備局ならびに社団法人河川ポンプ施設技術協会との3者にて共同特許出願中の「歯車減速機搭載型立軸ポンプ」(当社商品名：ラムダ-21)である。一人の持ち時間は30分間で、25分の発表と5分の質問時間が割当てられた。

私たちのセッションは、「ポンプ装置における新開発」と称する部門に属し、インガース・ドレッサ・ポンプ社取締役のクーパー氏と京都大学名誉教授・赤松先生が共同議長の下で行われた。こと、私たちに関しては事前の練習の成果もあり、OHPシートを用いた25分間の発表は首尾よく終了した。発表後の質問は二つあり、一つは「トータル・コンストラクション・コストとして、どのような効果があるか?」、他の一つは「水中モータポンプと比べて、どのようなメリットがあるか?」というものであった。前者に関しては、質問のあることを想定して資料も準備しており、ポンプ本体など機械設備としてのコスト削減効果は小さいが、土木・建築工事を含めた機場全体のコンパクト化に伴う建設コスト縮減に効果が大いことを説明し納得して貰った。後者に関しては、日本では概ね口径700mm位までの水中モータポンプにしか採用されていない状況であるが、本製品は2,000mmまでの大口径ポンプに適していることを説明した。しかし、当の質問者は、あまり納得していない様子であった。多分、質問者の彼はヨーロッパからの参加者であったのだろう。ヨーロッパでは、古くから6,000ボルト級の高電圧水中モータポンプが多用されていると聞く。一方、我が国では安全性などの面から、このような高電圧の水中モータは製造されていないに等しい現状である。この辺の国情の違いを上手く説明

できなかったことが何とも後味が悪く、英語力の不足を痛感させられた旅でもあった。

このような経験は、若ければ若いほどいい。若者は屈することなく世に出て、ドンドン発表すべきである。たとえ失敗しても、若いうちの失敗ならいい思い出で済む。成功すれば、えらい自信につながる。今後は、そんな気概のある若者を応援していきたい。それには、先ず「英語力」だが、これだけには「王道」がない。

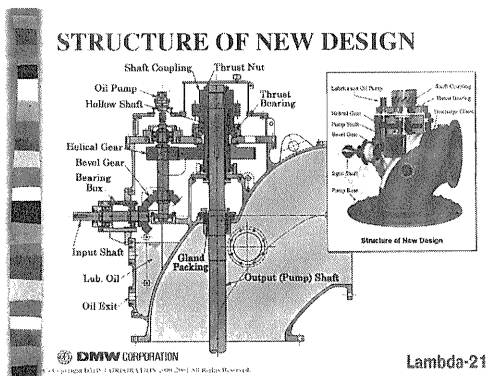


図-1 発表で使用したOHPシートの1枚